

伝記文学連講 7 Rex Warner, *John Milton*

野呂有子

Rex Warner (1905-74) は、John Milton (1949) の序文で、「ミルトンほどに古典やヘブライ文学に精通し、自分の時間を現実の政治に捧げた英国詩人はいないし、彼ほどに自分の公けの信念に従って生きた人間はめずらしい。彼は、その生涯、文体、業績のどれをとっても、並はずれて力強い姿を示している」と書いている。

ミルトン(1608-74)の思想的な側面が強調されすぎるとき、われわれは、彼も、また、生身の一人の人間であったという事実を忘れてしまい、「離婚主義者」、「盲目で失意の愛国者」、「反教権主義者」等のかたよったイメージを抱くことがある。しかし、ウォーナーは、一面的にミルトンをとらえようとする愚をいましめる。彼がミルトンの人と作品の中に見るのは、たぐいまれな資質に恵まれ、崇高な理想を抱き、その完遂を目指した人間の姿であり、現実にはさまざまな苦境にであい、傷つき悩みながらも、決して現実におもねることなく、主体的に、精力的にその生をまっとうした、前向きな人間の姿である。そして、ミルトンのこうした生き方の中にこそ、現代人の範とすべき、時代を越えて価値をもつ、あるべき人間の姿がある、と作者は主張する。「もしも、われわれ自身のもっている西欧的自由を保持するつもりなら、『慣習と盲目的追従という外と内からの二重の圧制』にたいして一生をかけて戦った、この偉大なプロテスタントを範例とすることが、今でもわれわれには必要である。」

ウォーナーが「最も書きたかった」と告白するこの伝記には、ミルトンの作品への賞賛と、その生涯のさまざまな問題についての洞察が満ちている。便宜上、生涯と作品は切り離して扱われているが、全篇を貫くのは、ミルトン自身の言葉に信をおき、生涯と作品の中で、作者の心にとくに訴える部分に、ウォーナー自身の主観的考察を加えるという態度である。これは、ウォーナーのミルトン礼賛の書であると同時に、現代の危機を深く憂える文学者が、あるべき人間の姿を世に問うた作品となっている。彼が、「私のミルトン像」を描くのに成功しているのは、先入観や通説にとらわれずに、共感を第一義とすることで、「外と内からの二重の圧制」から自由であろうとした、そのたまものであると言えよう。

たとえば、「リシダス」(1637)に対するジョンソン博士の酷評を非難して、ウォーナーは、この詩の完成度の高さを明らかにしていく。そして、その鋭い眼は、詩の背後にある若きミルトン——「みずみずしい感受性と情念」を備え、「感覚的喜

び」に魅かれ、「青年の死」の意味を自問し、決意を新たにしてい——を生き生きととらえている。

ミルトンにとって最大の試練は、初婚の失敗だったと作者は考える。「初婚の年が1643年ではなく1642年だと信じるミルトン学者がいる。この見解の根拠は、もし1643年説をとれば、実に、ミルトンは蜜月中に最初の離婚論を書き始めたことになる、というものだ。ただ、ミルトンなら、そのくらいのことは、やったかもしれない。」「非人間的なミルトン」のイメージを与えかねないという危険を冒して、(現代の通説にさからって)1643年を主張する作者の意図が、ミルトンの傷の深さを印象づけることにあるのは明白だろう。彼は、『離婚論』(1643-45)の行間に、傷のいたみに呻吟するミルトンの姿を照らし出してみせる。読者は、人間ミルトンの傷ましさに胸を打たれるとともに、逆境の中でも、誤りは誤りと認め、改めて自由の意味を問い直していく、真理に対する真摯な態度に、驚きの眼をみはるのである。

初婚の失敗による打撃は、政治的失望とあいまって、ミルトンの後期の作品に大きな影響を与えることになる。逆境を見据えることによって、彼はそれを普遍的な高みに押し上げた。逃避的態度からは、偉大な作品は生まれない、という実例がここにある。

『楽園の喪失』(1667)について、ウォーナーは次のように述べている。

It is this [i.e. [the poet's own character], I think, which gives an epic unity and passion to what might otherwise have been a mere disquisition on theology or poetical allegory. Milton feels deeply throughout. His mind is exercised not only by the general problems of reconciling sin and evil with the idea of a loving God, but by his own particular and personal disappointments in marriage and in Politics. Often, I think, one tends to exaggerate the importance of personal experience on a writer's work; but in the case of Milton I believe that it is hardly possible to exaggerate it. (pp.68-70)

ミルトンという作家が、「自分を基準に他人を判断する」という主観的傾向を持ち、個人の自由意志を最終的な拠り所とする人物であったことを思い合わせると、一見独断的と思えないでもない引用文が、非常な説得力をもって迫ってくる。ウォーナーは、上の文で、“I think”, “I think”, “I believe”と主観的表現を3度くり返して、結婚と政治におけるミルトンの失望が、この作品に与えた影響の深さを、たたみかけるように訴えている。主観的表現として他に使われているものには、“to my mind”, “(it) seems (to me)”等があるが、これらの表現は、人間ミルトンを強調するくぐり、かならずといってよいほどひんぱんに使われて、作者の意図を明確

にしているのは注目に値する。さらに、こうした表現は、“Methinks I see in my mind”で始まる『アレオパジティカ』(1644)の有名な一節に呼応して、個人の尊厳に深い信頼をよせるミルトンを思い起こさせるとともに、彼に深く共感するウォーナー自身の姿をも浮き彫りにする、という二重の効果をもっている。

さて、ウォーナーは、セイトンの描写とアダムとイヴの描写に「ミルトンの心の揺れ」を見る。セイトンは悪玉として描かれなければならないが、ミルトン自身の、「どんな権威にも屈せず、己れの自由意志を信ずる」という資質のゆえに、「少なくとも最初の数巻では」英雄的に描かれざるを得なかった。また、初婚の失敗による打撃のために、結婚の破綻が墮落の中核をなすに至った。樂園におけるアダムとイヴの結婚の描写ほど感動的で、情熱的に描かれているものはない。ふたりの愛し合う姿を、敵意と嫉妬の眼で見るセイトンの姿には、あるいは、理想の結婚を求めて果たせなかったミルトン自身の苦悶の姿があるのかもしれない。「樂園において、詩人にとって最も樂園的な要素であり、その喪失が最も傷ましく感じられるのは、この無垢で完全な男女の愛である。」

ミルトンの心の揺れるところに、彼の苦悶を読みとり、それが作品を柔軟で真実味のあるものにしていくというウォーナーの主張は、すぐれた鑑賞力と、深い人間理解を示すものだといえる。われわれは、この書が、ミルトン理解と作品解釈において確かな道標となっていることをここで再認識する。

晩年のミルトンが、精神と創作活動にいささかの衰えも見せず、平穏な日々を過ごした、とみるウォーナーは、創作年代がしばしば問題とされる『闘技士サムスン』を最後の作品だと考える。「かくて『安らぎと慰め』の内に詩は終わる。」「しかし、なんとという激しさ、狂おしさで、全ページが満たされていることか。」政治的な失望、結婚の破綻、失明というたび重なる不幸の中で、主人公はひたすら神の摂理を信じ、「己れ以外に責めるべきものとて他に誰があらう」と自問しつつ内省を深めていく。そして、ついに、人間としての尊厳をとりもどす。これは、紛れもなく、作者ミルトン自身の姿でもある。この意味で、『闘技士サムスン』は、生身のミルトンとその感情が、最も直接的に感じられる作品となっている、とウォーナーは確信する。

ギリシア悲劇の形式を、ギリシアの悲劇作家たち以上に厳しく踏襲しながら、ミルトンは、むしろ、自由にのびのびと、力強くきわめて完成度の高い作品を創り出した。ミルトンにあっては、牧歌、叙事詩、悲劇等の形式は、足かせとなるどころか、テーマを最高度に展開させるものとなっていることを、ウォーナーは明示している。われわれは、ミルトンの偉大さを改めて実感するとともに、ウォーナーの文芸作家としての手腕にも舌を巻かずにはおれない。

ミルトンの人と作品に対して、主観的アプローチの方法をとったものとしては、本書は、おそらく、ミルトンの実像に迫り得た、最高の部類に属するものの一つだと思われる。文学が、普遍的・象徴的な言語によって精神を覚醒させ、あるべき人間の姿を追求することを止めない限り、そして、文学研究において、共感が意義を失わない限り、本書は、原点としての位置を保ちつつ、今後のミルトン研究に対しても多くの示唆を与え続けることであろう。その意味で、しめくくりとなるウォーナーの次のことばは興味深い。「平凡で安易な解決に甘んずることなく、人格の自由を束縛するいかなる機構にも抵抗するミルトン、また、階級的意識を越えた貴族的精神、繊細さ、『光をともしられた内なる眼』、突如として湧き上がる力強さを備えたミルトンは、われわれ自身の時代にとくに価値をもっているのではないだろうか。」これが、30年後の今日にも通用する、いや、なおさら重要な意味をもつことばであることは言うまでもない。

(東京成徳短期大学講師)